

日本の文化が外国に影響を与える。実はその影響の与え方に二つあります。それは相手が日本の文化ということを意識して、受け入れる、あるいはそれを学んだという姿勢でやるのと、もうひとつは全く知らん間に入ってきてるという二つであります。例えば活け花や、お茶の先生が向こうで講習会をやって教える、これは明らかに向こうが日本の文化ということを意識して、それを知ろうじゃないかということですが、いまの歌は全然そうじゃない。向こうは何んにも意識せず、知らないうちにどんどん入っちゃってるわけです。どちらがより影響が大きいかといいますが、私はどうも後者じゃないかと思えますね。前者の場合はよし日本ってのはどんなやつだか一つ見てやろうと身構えているわけなんです、片っぽはそれが何にもない。だから向こうの心の中にグーッと入っちゃうわけですね。そして、それが中には向こうの人に新しいアイデンティティを与えて文化になってしまふものがある。こうなったとき、この影響は本物であります。片っぽはほんのうわべだけで、もう一方は心の底からそうなってしまふということですから、むしろ、身構えないやつの方が恐ろしいというか、影響としては本物である。どうも最近の日本の音楽を見ておりますと、身構えないうちになんか、影として本物である。どうも最近の日本はいろいろな面での技術の進歩というものではないかと思ふんですね。

日本人というのは、どうも悪いくせがありまして、外国人の接待をして、日本の音楽を聴かせますよという、必ず『さくらさくら』をやるんです。私はどうもあれ聴くと胸がそ悪くなるんですが、だいたい日本人は今やうたいやしませんよ。うたわないのは私だけかもしれないけれど、どうしてあれが日本の代表的な歌とみんなが言うのか分からん。ほとんどすべての、日本の大衆が普段全然うたいもしない歌をなぜ日本の代表とするのか。これは私が音痴というゆえんではありませんが、それにはいろいろ理由があるのかもしれないし、そんなことを言うと小泉先生にしかられるかも知れませんが、一種の身構え型ですね。ところがそんなことより、もっと知らんうちにどんどん浸透している。このほうが重要な意味を持っていると思うんです。

これがまさに文化の文明化から文明の文化化への一つの表れでありまして、音楽が新しい文化になりつつあることでもあり、音楽というものが一つの新しいコミュニケーションの道具として立派に文化交流の役割を果たしつつある証拠ではないかという気がするわけでありまして。